

総合的な音楽能力の育成に関する研究

— 「〈音楽家の耳〉トレーニング」システムを導入した授業における教育方法の比較—

岡田 陽子

(エリザベト音楽大学)

Fostering Comprehensive Music Ability: A Comparison of Educational Methods in Classes Introducing “The Musician’s Ear Comprehensive Training in Musicianship”

Yoko OKADA

Abstract

In 2000, the Elisabeth University of Music launched a developmental system to foster the comprehensive ability necessary for the practice of music. In 2002, “*The Musician’s Ear Comprehensive Training in Musicianship*” was published to train subjects in the system. Since 2000, the Elisabeth University of Music has taught this system as a compulsory subject, aiming to foster comprehensive musical ability by integrating learning of solfège and music theory. However, although teaching is based on this system, no specific instruction manual is available. Thus, the method of education is left to the teachers’ discretion. In this study, I observed two classes, recorded video and interviewed two teachers to investigate and analyze the teaching methods used in each class. A comparison of the two teaching methods revealed several similarities, and some points of difference. Similarities included the method for selecting teaching material, and an emphasis on aural training. Differences included the method of operation of the system. Thus, even when the same educational system was employed, various approaches were used for the method of education. In addition, the investigation identified several difficulties among students, suggesting possibilities for the development of new teaching methods to resolve them.

1. 研究の背景と目的

2000年、エリザベト音楽大学は、学内に「基礎教育システム開発プロジェクト」を設け、音楽の実践に必要な総合的な能力を育成するためのシステムの開発に着手した。2年後の2002年には、開発したシステムによるトレーニング課題を収めた『〈音楽家の耳〉トレーニング』(Part 1, Part 2)が春秋社より出版された。同年から現在に至るまで、同大学ではこのシステムを必修科目の「ソルフェージュⅠ・Ⅱ」, 「音楽理論Ⅰ・Ⅱ」に導入し、ソルフェージュと音楽理論を別々に学ぶのではなく一体化させて学ぶことにより、総合的な音楽能力を育成することを目指してきた。授業担当者たちはこのシステムを基に授業を行っているが、具体的な指導のマニュアルは無いため、授業の際の教育方法は担当者に任されている。

本研究では、2016年度にエリザベト音楽大学で行われた2人の授業担当者による1年生の授業を観察しインタビューを行い、このシステムを基に展開されている教育方法について調査を行う。それぞれの授業における教育方法を比較し共通点や相違点を見出し、このシステムが目指している音楽の実践に必要な総合的な能力を育成する教育方法の様々な可能性を明らかにすることを研究の目的とする。

2. 「〈音楽家の耳〉トレーニング」システムの概要と運用方法

(1) 「〈音楽家の耳〉トレーニング」システムの特徴

このシステムは3つの特徴を持つ。第1の特徴は、中世・ルネサンスから現代に至る音楽作品を教材として用い、音程、音階、和声進行、形式、構造等の理論を体験的に学習することである。様々な音楽に親しむことにより学習者の音楽性を豊かにし、同時に音楽様式の間接的な感覚をも養うことを目指している。第2の特徴は、楽譜を用いずに音楽を「耳」のみで捉える「オーラルトレーニング」(Aural Training)を重視していることである。従来行われてきた視唱や聴音等、楽譜の読み書き中心のトレーニングに留まらず、音程やリズム、そして音楽の表情や形式等を「耳」で瞬時に捉え、それに即座に反応できる能力を養うことを目指している。第3の特徴は、学習段階を14のグレードに分け、子どもにも対応可能な初歩の段階から大学卒業以上の高度なレベルに至るまでの内容を網羅していることである。

(2) 「〈音楽家の耳〉トレーニング」システムを用いた授業内容

実際の授業では上記3つの特徴を活かしソルフェージュと音楽理論を統合させている。従来行われてきた聴音と視唱の他、楽譜を見ない、耳のみの訓練による課題も行い、学生は耳で捉えた感覚と音楽理論を結びつけ総合的に学んでいる。一方、楽譜を見る課題についても、音楽理論と合わせて総合的に学んでいる。楽譜を見ない、耳のみの訓練によるものと、楽譜を見るものの課題項目は以下である。

課題項目

【楽譜を見ない、耳のみの訓練によるもの（オーラルトレーニング）】

- ・ 拍子をたたく
- ・ リズムをたたく
- ・ 真似して歌う
- ・ リズムパターンをたたきながら真似して歌う
- ・ 曲の表情を感じる・音楽の表情と形式の理解・音楽の構造と様式の理解
- ・ 覚えて演奏する
- ・ 違いを見つける
- ・ 2声・3声の記憶唱と記憶演奏

【楽譜を見るもの】

- ・ 視唱
- ・ 2声・3声の下のパートを歌う
- ・ 移調
- ・ 楽譜との相違点の認識
- ・ 即興・伴奏の即興・自由即興
- ・ 通奏低音

(3) 「〈音楽家の耳〉トレーニングシステム」の運用方法

エリザベト音楽大学では、「ソルフェージュ」と「音楽理論」を統合させ、必修科目の「ソルフェージュ I・II」、「音楽理論 I・II」に「〈音楽家の耳〉トレーニングシステム」を導入した授業を行っている。1年次初回授業でクラス分け試験を行い、学生のタイプにより4つのクラスに分けるが、習熟度に応じて途中でクラスを移動することは可能である。1年生は週2回、2年生は週1回この授業を履修している。

クラスのタイプ

A：入学前にソルフェージュ（聴音・視唱）と音楽理論の学習経験が十分にある

B：入学前にソルフェージュ（聴音・視唱）と音楽理論を一通り学習している

C：入学前にソルフェージュ（聴音・視唱）と音楽理論を少し学習している

D：入学前にソルフェージュ（聴音・視唱）と音楽理論の学習経験が余りない、あるいは経験がない

(入学試験の種類によっては、受験にソルフェージュと楽典を課していない場合もあるため)

授業担当者はこのシステムを基にし、それぞれのクラスの状況に応じて授業内容を組立て、それに沿った教材や指導法を考案し授業に臨む。そのため、クラスの状況や授業担当者によって様々な教育方法が存在することも、このシステムの特徴である。

3. 「〈音楽家の耳〉トレーニング」システムを導入した授業の観察

2016年11月29日にエリザベト音楽大学で行われた2人の授業担当者による1年生のCクラスとBクラスの2クラスの授業を観察した。さらに、同年12月3日と6日には、授業の目的や意図について、授業担当者にそれぞれインタビューを行った。授業は同時間に行われたため、実際には、教室での観察とビデオの録画による観察の半々となった。インタビューでは、予め質問を用意しておき、実際の授業を録画した映像を一緒に見ながら質問に答えてもらう形で進めた。

(1) 1年生Cクラスの授業観察とインタビュー

1) 授業の概要

対象：1年生Cクラス15名、授業観察日：2016年11月29日（火）8:50～10:45（115分）

授業担当者：H先生（専門：作曲）、インタビュー：2016年12月3日（土）15:50～17:30

2) 授業担当者の目指している内容とクラスの状況

Cクラスは、入学前にソルフェージュと音楽理論を少し学習しているクラスで、授業担当者はH先生である。インタビューを通して、1回の授業の中にできるだけ多くの活動を含めるよう授業計画がなされていることがわかった。学生が、聴く、覚える、歌う、リズムをたたく、理論を学ぶ、楽譜を読む、分析する、書く、作る等多くの活動を通して音楽的な感覚を養い、理論を学ぶことで音楽の仕組みを捉え音楽への理解を深めていくことを目指しているからである。ただ、毎回の授業の中で、これら全ての活動を行う訳ではなく、内容によっては1つの活動に長い時間をかける場合もある。

また、多くの音楽作品を用いて同じ活動を繰り返す中で、耳から捉えた感覚と音楽理論を結びつけていくことを重視している。特に、実際の音楽作品を聴いた時に、学習した音楽理論が使われていることに気づくことは、学生にとって難しいことであるため重視している。さらに、複声部を認識することも学生にとって難しいことであるため、どの活動を行う際も、1つの声部のみでなく他の声部にも意識を向けるよう促している。

授業中は、学生の理解度を把握するために学生との対話を活発に行い、反応を見ながら授業を進め、学生に質問する際は、誘導して答えさせるのではなく、学生が自分で考え始めるようなきっかけとなる発問を心掛けている。そのため、時には学生同士でお互いの活動を評価する課題も行う。学生たちは、ピアノの周りに椅子を持って集まり、先生とのコミュニケーションだけでなく、学生同士のコミュニケーションも取り易い環境で授業を受けていた。但し、書く活動を行う場合は、机のある席に戻っていた。

(2) 1年生Bクラスの授業観察とインタビュー

1) 授業の概要

対象：1年生Bクラス18名、授業観察日：2016年11月29日（火）8:50～10:45（115分）

授業担当者：M先生（専門：チューバ）、インタビュー：2016年12月6日（火）11:30～13:00

2) 授業担当者の目指している内容とクラスの状況

Bクラスは、入学前にソルフェージュと音楽理論を一通り学習しているクラスで、授業担当者は、M先生である。インタビューを通して、ソルフェージュと音楽理論を学習することにより音楽を理解し、演奏する際に必要となる力を養っていくことを目指していることがわかった。聴く力、聴いた響きを楽器の音を頼らずに自分の頭で再現する力、声部の流れを把握する力、相対的に音程をとる力、和声音と非和声音を把握する力、終止形を感じて歌う力、和声進行を感じて歌う力、拍子を感じて演奏する力等、演奏する際に必要となる力をこの授業の中で身につけることを重視しているからである。そして、この授業で身につけた音楽的な感覚と学習した音楽理論を、各自が演奏している曲にも結びつけ、練習する際に応用していくことができるようになることを望んでいる。そのため、具体的に練習方法も細かく示し、各自の実技に結びつけることができるよう考え授業を組み立てている。

授業中は、学生の理解度を把握するために学生との対話を活発に行い、反応を見ながら授業を進めてい

くことを心掛けている。

入学前に一通りソルフェージュと楽典を学んでいる学生たちは、楽譜を見ずに行う、オーラルトレーニングや、音楽理論を感覚的にも捉えるトレーニング等、これまで経験したことのない内容に戸惑うこともある（例えば、楽譜を見ずに音楽を聴き拍子を捉えること、音程を相対的にとること等）。そのため、学生たちの意識を変えることに難しさを感じているが、学生たちの意識が変わるきっかけが見つかることを願い、授業の内容を考えている。

(3) 2人の授業担当者の授業内容の比較

授業内容の比較は以下である。

表1 2人の授業担当者の授業内容の比較

*はポイントと思われる授業担当者の発言内容等

時間	1年生Cクラス		1年生Bクラス
0'00"	導入：挨拶・出席	0'00"	導入：挨拶・出席
1'31" (11'53")	1. 前回の授業の復習 1.1 和音の響きを捉える ・ピアノで和音のみを弾き、和音の響きを捉える ・実際の音楽作品を用いて同様に行う ・和音が変化する箇所を指摘する *「曲になるとわかりにくい？」と学生に問う	2'30" (12'46")	1. 前回の授業の復習 1.1 カデンツを聴き、和声進行を捉え、全てのパートを書く ・主音を聴き、頭の中で1度の和音を歌う ・カデンツを聴き和声進行を捉え、和音記号と和音の機能を書く * 和音記号から書く
13'24" (8'00")	1.2 カデンツを聴き、バスのパート、和声進行、終止形を耳で捉える。 ・バスのパートをハミングする（主音と属音等、音の働きを確認） ・様々な和声進行を一人ずつ答える * 終止の箇所「続くよう？」と学生に問う * 終止がわかれば和声進行がわかる	15'16" (8'41")	1.2 カデンツの各声部を歌い（楽譜を見ずに）、その後、書いたカデンツと照らし合わせる ・カデンツの各声部を歌う * 主和音を聴き主音、開始音をとる * 各声部の動きに注意して歌う（復習） * 声部の流れ（導音→主音）を覚えておく ・バスのパートを歌う（様々な調で）
21'24" (4'49")	1.3 実際の音楽作品を聴き、和音の変化と和声進行を捉える。バスのパートを聴いて歌う ・和音が変化する箇所を指摘し、変化した和音、和声進行を捉える * サブドミナントの感じがすると良い	23'57" (17'21")	1.3 カデンツの仕組みを確認する ・カデンツについて知っている、歌う時、助けとなることを考える ・バスのパートの音程関係を考え、バスが何の音からでも歌えるように音程を相対的にとって歌う ・カデンの和音の機能、和音の種類、音程等の確認 ・カデンツのバスを歌う（長調、短調） * 主和音を聴き開始音をとる ・終止形を捉え、終止を感じて歌う ・拍子を感じて歌う ・1人ずつ様々な調でカデンツのバスを歌う * 音程に注意 * 機能を感じて歌う
26'13" (32'51")	2. 実際の音楽作品を聴き、拍子、旋律、和声進行、リズム等を捉えた後、楽譜と結びつける B. フリース (1770-?) : 子守歌 ・音楽を聴き、拍子を捉える ・和音が変化する箇所を手をたたく ・旋律を真似して歌う * 主和音を聴き、開始音をとる * 和音の変化、和音の種類を感じて歌う * 和声音と非和声音を捉え、感じて歌う ・旋律のリズムを捉える 拍子を確認しリズムを書き、たたき、続きのフレーズのリズムと同じかを聴いて確かめる ・原曲とは変化したリズムに気づく（2箇所） 変化したリズムに気づき、そのリズムを書きたたき ・リズムパターンをたたきながら旋律を真似して	41'18" (15'21")	1.4 相対的に音程を捉えて歌う ・3人1組で長三和音を歌う（順番に全員） 1人目の学生が根音を決めて歌い、2人目は第5音、3人目は第3音を順に歌う * 全体の長三和音の響きを思い浮かべて歌う ・長三和音から半音上の長三和音を歌う等々 * 「音名がわからないから歌えない」と言う学生

	<p>歌う</p> <ul style="list-style-type: none"> * 拍子を感じてリズムパターンをたたく * 和音の変化を感じて歌う * 2つのリズムパターンに分かれて歌い、アンサンブルをする * 隣の人がたたく違うリズムも感じる <p>・楽譜を見て、聴いた音楽と照らし合わせる たいたリズムを確認する 音楽用語を確認する</p> <p>・楽譜を見て歌う（2小節カウント）</p> <p>・次回までに、非和声音に丸印をつけ、非和声音の種類を書く</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・「ぞうさん」の旋律の続きを様々な高さで歌う * 音の高さでなく、音程を相対的にとって歌う * 音名を知らなくても歌えた ・カデンツを4声に分かれて歌う * 頭の中で主和音を鳴らしてから歌う ・同主調にして歌う、半音下げて歌う * 相対的に音程をとる * カデンツを歌い、響きを体感することによって、相対的に音程をとることを習慣とする * 実際の音楽作品を歌う時にも同様に
59'04" (11'37")	休憩	56'39" (11'21")	休憩
1°10'41" (19'54")	<p>3. 視唱</p> <p>W.A. モーツァルト：歓喜に寄す K53</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽譜を眺め、気づいたことを答える * いろいろな情報を自分の力で読み取る * 旋律以外のパートも見る ・調性を確認する * 転調に注意する、どこから転調か考える ・音楽用語の確認 ・バスのパートを見て和声進行を確認 ・終止形を確認 ・楽譜を見て歌う * 歌いながら転調や終止を感じる ・作品を聴く。転調について考える ・終止形から転調を考える 転調している箇所を考え、主調との関係を考える ・歌う（前半） 偽終止の箇所を捉える * 偽終止や転調等を感じて歌う ・偽終止と全終止の比較 ・歌う（最後まで） * 普段転調する時は何か気をつけて演奏しているか学生に問う ・後半の転調の調関係を確認 ・次回までの課題：後半の偽終止の箇所を探す 	1°08'00" (16'39")	<p>2. 視唱（復習）</p> <p>オリジナル 寺内大輔、『〈音楽家の耳〉トレーニング』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の課題の確認（和声分析） ・楽譜を見て歌う（2小節カウント） * 開始音の和音の種類は？ * 主和音を聴き開始音をとる ・和声分析（和音の転回形、和声進行、和音の機能、非和声音等） * 終止形を捉える ・和声音か非和声音か感じて歌う ・和声音か非和声音か半断しながら、ゆっくり歌う ・ゆっくりの速さから少し速いテンポにし、次の和音の響きを予想しながら歌う ・通常のテンポで歌う ・一度、旋律と和音を聴く（ピアノで演奏） ・旋律を2小節ずつ聴き、真似して歌う * 拍子の感じ方、リズムの感じ方は？ ・通常のテンポで歌う * 和声音等ゆっくり確認して歌った後は、音楽が流れるように歌う練習も必要 ・練習方法について * 自分の専門実技の練習の中でも、このような段階を細かくやってみることを試して欲しい
1°30'35" (2'49")	<p>4. リズムの創作（6/8 2小節）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が作ってきたリズムをたたく（学生同士でも交換したたく） 	1°24'39" (28'28")	<p>3. 実際の音楽作品を聴き、音楽の表情を捉える</p> <p>R. Schumann：少年のためのアルバム Op. 68, 第1部 小さい子供たちに、9. 民謡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽を聴く「後から質問します。どんな特徴があるかよく聴いてください」 ・もう一度聴く * 課題のプリントに答える ①拍子 ②長調か短調か説明 ③テンポについて説明 ④主題の再現と変化 ⑤いくつかの部分に分かれているか ⑥終止形と和音の種類 ⑦多声的か和声的か ⑧時代と作曲家 ・音楽を聴き終止の種類と最後の和音の種類を書く ・拍子を捉える ・旋律を覚えて歌う
1°33'24" (15'16")	<p>5. 旋律を覚えて書く</p> <p>ドイツ民謡：みんな一緒に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・和音の変化に気を付けて一度聴く ・もう一度聴き、和音が変わったところを捉え、和音記号だけを書く * 聴きながら書かない * 音、リズムのみを捉えるのではなく、音楽全体を聴く 		

	<ul style="list-style-type: none"> ・終止形を捉える ・旋律を覚えて書く <ul style="list-style-type: none"> * 主和音と開始音をハミングする ・書いた旋律を歌う ・原曲とは変化した旋律のリズムに気づく 		<ul style="list-style-type: none"> * 自分の思った拍子で * 何かに変換しないでそのまま歌う ・時代・作曲家について考える ・フェルマータについて ・課題プリントの提出
1°48'40" (4'04") 1°52'43"	6. まとめ <ul style="list-style-type: none"> ・気づいたこと、新しく学んだこと等を書き提出 終了	1°53'16"	<ul style="list-style-type: none"> ・終了

1年生Cクラスは前回の復習から始まった。1.1番は、和音の響きを捉える活動であった。ピアノで演奏される3つの和音を聴き、響きが変わる瞬間を捉える活動が行われた。音の名前から和音を捉えるのではなく、同じ響きか違う響きかという全体の響きを捉え、和音が変化する箇所を指摘する活動であった。実際の音楽作品を用いて同様の活動が行われた際、H先生が「曲になるとわかりにくい？」と学生に尋ねる場面があったが、実際の音楽作品で同様の活動を行った場合、学生たちは難しく感じているとのことであった。1.2番では、カデンツを聴き、バスのパート、和声進行、終止形を耳で捉える活動が行われた。バスのパートをハミングし、主音と属音の働きを確認し、バスのパートに意識を持つことが促された。終止の箇所「続くよう？」と学生に尋ねていたのは、終止について理論だけでなく響きを自分の耳で捉えた時の感覚をも一緒に身につけて欲しいと考えているからであった。1.3番では、1番で行った音楽作品を再び取り上げ、和音が変わる箇所に気づくだけでなく、終止を捉え和声進行を答える活動へと発展していた。2番は、これまで授業では取り上げられていなかった新しい作品を聴き、拍子、旋律、和声進行、リズム等を捉えた後、楽譜と結びつけていた。旋律を真似して歌う際は、まず、拍子を捉え、主和音を聴き開始音を取り、和音の変化や和音の種類を感じて歌うことが促された。様々な活動を経た後、最後に楽譜を見て、聴いた音楽と照らし合わせていた。

休憩後は、3番の視唱が行われた。新しくモーツァルトの作品が取り上げられ、まず楽譜を眺め、気づいたことを答えることから始まった。学生たちはどこから転調しているか考えていた。和声進行、終止形、調性を確認した後、歌う際は、転調や終止を感じて歌うよう促された。最後は、普段、曲を演奏する際、転調する時は何か気をつけて演奏しているのか学生に尋ね、実技との関連にも触れていた。4番は、リズムの創作で、学生が作ってきたリズムをたたく活動であった。6/8拍子のリズムを作ることを通して拍子についての理解を深めることが意図されていた。5番は、旋律を覚えて書く活動で、6/8拍子の作品を聴き、和音の変化する箇所、終止形を捉え、旋律を覚え、歌い、楽譜に書くこと等が総合的に行われていた。音楽を聴く間は鉛筆を置き、聴きながら書かないことが強調された。音のみ、リズムのみを捉えるのではなく、音楽全体を聴くことが意図されていたからである。6番は、まとめで、気づいたこと、新しく学んだこと等を書き提出した。

このように、和音の響きを捉える、拍子を捉える、真似して歌う、楽譜を読む、視唱する、音楽理論を学ぶ、リズムを作る、覚えて書く等、様々な活動を通して、耳で捉えた感覚と、音楽理論を結びつけ総合的に学んでいた。また、歌う際には、学んだ音楽理論（転調や終止形等）を感じて歌うよう促されていた。

1年生Bクラスはカデンツの復習から始まった。1.1番は、カデンツを聴き、和声進行を捉え、全てのパートを書く活動であった。その際、主音を聴き、頭の中でI度の和音を歌うことが促された。それは、カデンツを聴く際、全体の響きを聴くことを学生に思い出させるためであった。また、音の名前を1つずつ聴くのではなく全体の響きを掴むために、和音記号から書くことが促された。1.2番は、楽譜を見ずにカデンツの各声部を歌い、その後、書いたカデンツと照らし合わす活動であった。主和音を聴き主音や開始音をとることにより、常に全体の響きを感じるよう促されていた。各声部の流れを把握することも重視され、導音と主音の役割等も意識して歌うよう促されていた。1.3番は、カデンツの仕組みを確認する内容であった。カデンツについて知っていると、カデンツを歌う時、助けとなることは何かを考える活動が行われ、最後には1人ずつ様々な調でカデンツのバスを歌う活動へと発展した。常に、音程に注意し、終止や機能を感じて歌うことが促された。1.4番は、相対的に音程を捉えて歌う活動であった。3人1組で長

三和音を歌う活動が行われるなか、「音名がわからないから歌えない」という学生の発言があった。そのため、「ぞうさん」の旋律の続きを様々な高さで歌う活動が行われたが、その際には音の高さではなく、相対的に音程をとって歌うことが促された。最後に再びカデンツを歌い、響きを体感することによって、相対的に音程をとることを習慣とするよう促し、これまでのまとめがなされた。

休憩後は、2番の視唱が行われ、前回に出された和声分析の確認から始まった。楽譜を見て歌う際には、和声音か、非和声音か感じて歌うよう促された。始めは、和声音か非和声音か判断しながらゆっくり歌い、次に、ゆっくりの速さから少し速いテンポにし、次の和音の響きを予想しながらで歌うよう促された。通常のテンポで歌えるようになるまでの練習段階が丁寧に示され、順に体験していった。そして、その練習方法は、それぞれの自分の専門実技の練習の中でも活かしていくように示された。3番は、シューマンの作品を聴き、拍子、テンポ、終止形や和音、時代等を捉える活動であった。その際に、拍子を正しく捉えられていない学生が多かったため、M先生は、歌えば拍子を感じることができるかもしれないと考え、旋律を覚えて歌う活動が行われた。しかし、多くの学生は覚える際、聴いたものを音名等に変換してしまうため、瞬時に覚えて歌うことは難しく感じているとのことであった。

このように、学生の抱えている問題を受け止め、演奏する際に必要となる力を身につけていく活動が多く行われていた。そして、身につけた音楽的な感覚と学習した音楽理論を、各自の実技に結びつけていくことが重視されていた。

4. 観察した授業の考察

観察した授業とインタビューをまとめ、2人の授業担当者の教育方法を比較し、共通点や相違点を明らかにする。

(1) 授業における教育方法の共通点

主に以下の6点があげられる。

1) 実際の音楽作品を教材として用いている。

様々な音楽を聴き、音楽に親しむことにより学習者の音楽性を豊かにし、同時に音楽様式の間も養うことを目指している。

2) 実際の音楽作品を用いて音楽理論を体験的に学ぶ。

音程、終止形、和声進行等の理論を知識のみでなく、聴く・歌う等の活動を伴い体験的に学習している。

3) ソルフェージュと音楽理論を統合し総合的に学ぶ。

ソルフェージュと音楽理論を別々に学ぶのではなく、一体化させて学ぶことにより、総合的な音楽能力を育成することを目指している。具体的には、①楽譜を見ずに耳で捉えたものを音楽理論に結びつける、②楽譜を見ずに耳で捉えたものを楽譜に結びつける、③楽器に頼らずに、音楽の響きを自分で組み立てる力を養う、④聴き、覚え、歌ったものを楽譜に書き、分析する、⑤楽譜から様々な情報を読み、分析し、演奏する等の活動があげられる。

4) オーラルトレーニングを重視している。

楽譜を用いずに音楽を「耳」のみで捉える「オーラルトレーニング」を重視している。拍子、リズム、和音、音楽の表情等を「耳」で瞬時に捉え、それに即座に反応できる能力を養うことを目指している。具体的には、「拍子をたたく」、「真似して歌う」、「覚えて演奏する」等のトレーニングを行い、拍子感、リズム感、和声感、調性感、終止感等の育成を図っている。その際は、能動的に聴く姿勢を促している。

5) 身につけた音楽的な感覚と学習した音楽理論を演奏に活かす。

身につけた音楽的な感覚と、学習した音楽理論を各自の専門実技に結びつけ、活かすことができるよう促している。具体的には、①オーラルトレーニングで養った拍子感を活かし、音楽の流れに乗って演奏する、②和声感、機能感、調性感、終止感等を持って演奏する、③作品を分析して理解したことを演奏する際に活かす等である。

6) 学生の段階に応じた指導

学生のタイプとクラスの状況に応じて教材を選択し、授業内容を組立てている。授業中も学生との対話を活発に行う中で学生の理解度を把握し、学生のタイプや段階に応じた指導を行っている。

(2) 授業における教育方法の相違点

2人の授業担当者は、同じシステムを基に授業を行っているため、教育方法は大きく異なっているとはなかったが、システムを運用する際のアプローチの方法に異なる面が見られた。

H先生は、1回の授業の中にできるだけ多くの活動を含むよう授業計画を行っていた。学生が、聴く、覚える、歌う、リズムをたたく、理論を学ぶ、楽譜を読む、分析する、書く、作る等多くの活動を通して、音楽的な感覚を養い、理論を学ぶことで音楽の仕組みを捉え、音楽への理解を深めていくことを目指しているからである。また、多くの音楽作品を用いて同じ活動を繰り返し、耳から捉えた感覚と音楽理論を結びつけていくことを重視していた。

M先生は、ソルフェージュと音楽理論を学習することにより音楽を理解し、演奏する際に必要となる力を養っていくことを目指していた。聴いた響きを楽器の音を頼らずに自分の頭で再現する力、声部の流れを把握する力、相対的に音程をとる力、和声音と非和声音を把握する力、終止形を感じて歌う力、拍子を感じて演奏する力等、演奏する際に必要となる力をこの授業の中で身につけ、身につけた音楽的な感覚と学習した音楽理論を、各自の実技に結びつけていくことを重視していた。

なお、授業観察は1回のみであったため、両クラスを比較した際、それぞれのクラスで行われていない活動も見られたが、クラスの状況に応じて授業計画が行われているため、毎回今回同様の内容とは限らない。今回は、年間を通して授業計画がたてられている中の1回分の授業からの考察である。

(3) 授業担当者が共通で感じている学生の課題と、学生が難しいと感じ戸惑っている内容

両担当者のインタビューと授業観察の中から、次の課題が浮かび上がった。①音楽を聴く際、音名のみ集中してしまい、音楽全体を捉えるのが難しい。そのためフレーズを覚えること、和声進行を捉えることが難しい。この問題に関連し、音程を相対的にとることも難しい。②学習した音楽理論と、実際の音楽を結びつけることが難しい。③身につけた音楽的な感覚と学習した音楽理論を、演奏する際に応用することが難しい。促せば試みる場合もあるが、自分で気づいて応用することは難しい等、主に3点があげられる。

5. おわりに

2人の授業担当者の教育方法には共通点と相違点が見られたが、両担当者も音楽的な感覚を養い、音楽への理解を深めるという点においては共通であった。授業担当者によりシステムを運用する際のアプローチ方法が異なる背景については、H先生は作曲が専門であり、M先生は管楽器が専門であるというように、それぞれの専門が関係している可能性がある。このように、同じ教育システムを運用した場合でも、教育方法については、様々な可能性があることが明らかとなった。さらに、調査の過程で、学生が抱えている様々な課題も浮かび上がり、解決に向けて新たな教育方法の開発の可能性が示唆された。今後は、これらの課題の考察を通して、総合的な音楽能力とは何か、またその育成についても研究を進めていきたい。

引用・参考文献

エリザベト音楽大学編(2008)『新版〈音楽家の耳〉トレーニング』(Part 1, Part 2) 春秋社。

平田裕子, 森藤みこ (2016)「音楽理論とソルフェージュの統合的学習—音楽基礎教育システム〈音楽家の耳〉トレーニングを用いて—」『平成27年度 全日本音楽教育研究会 大学部会 会誌』pp.22-28.